

市同教総会 研修会講演

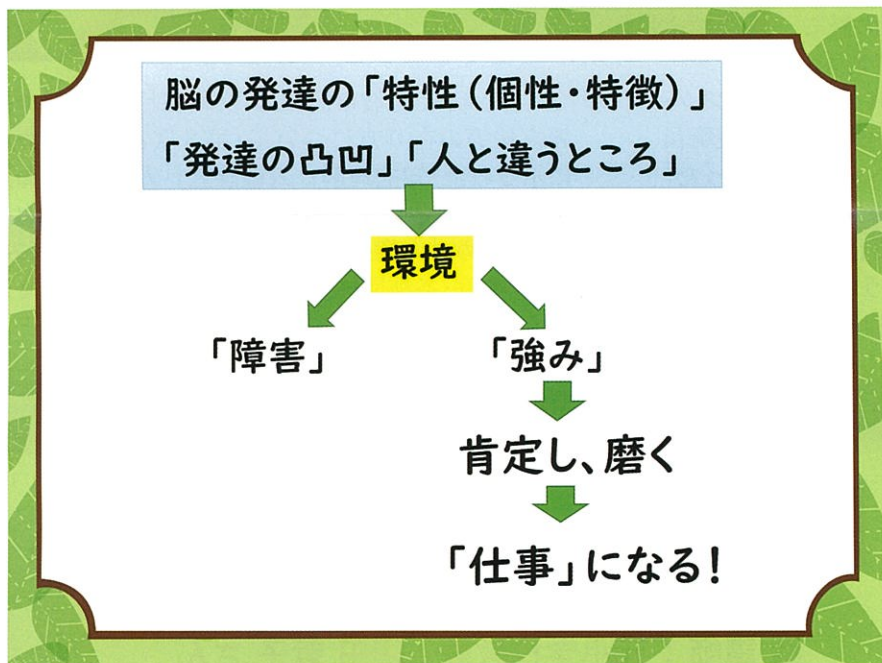
演題 「ふつう」って何だろう？ ～日々のできごとから学ぶこと～

講師 八尾 由江さん(一般社団法人am*am代表理事)

○ 小児科クリニックでのこと ～「先生、治るでしょうか」～

私は子どものころからの夢であった小学校の教員を12年間続けましたが、家庭の事情で辞めることになり、平成20年に小児科のクリニックに勤めました。そこにやってくる子どもたちは様々な特性をもっていますが、これらは決して珍しい特性ではありません。だれにでも苦手なことがあります。ですから、そのことに困っていなければ障がいではないのです。それどころか、それを生かして仕事をしている人もいます。このような特性は、捉え方一つで、障がいにもなるし仕事にもなります。私は、この子たちへの正しい理解が進んでいけば、地域が変わると思います。成功体験を増やすことで、子どもたちの可能性が磨かれ、地域の宝になるはずですが、でも、私たちはこの子たちを地域の隅っこに追いやってはいないでしょうか。

様々な不安をもって相談に来られたお子さんや保護者の方々は、社会適応したい、認めてほしいと願っています。そして、泣きながら「先生、治るかな?」「どうしたら治る?」と言われる。そんなとき私は、『できることと、できないことがある』で困っているのではなく、『できることと、知らないことがあるだけだ』と答えています。例えば、ハサミを貸してほしいとき、「ハサミ貸してね」でよいときもありますが、今、ハサミを使っている友達に言うときは、これではダメですね。「使い終わったら、あとで貸してね」と言うほうがよいでしょう。このようなことを知れば、自分の気持ちを誤解なく伝えることができるのです。その際には、一人ひとりの理解の仕方の違いに合わせる必要があります。その違いの程は、住んでいる国が違うくらい大きく違うということです。一人ひとりの国の言葉で教えないければ、何回教えても理解はできません。理解すると、できるようになることが増えていきます。



○ am*am (あむあむ) の理念と目的

主語は自分、どんなことでも人ごとにせず自分ごととして考えます。*は、プログラミングの言葉で「かける」の意味があります。多様な人や多様な思いが出逢う場所という願いで名づけました。

その理念は、「あるもの見つけ あるもの磨き その先へ…」です。その先とは、「なりたい自分」です。その人の自己実現を応援します。目的は、地域課題の解決と社会貢献です。就職できていない人を就職させるための会社ではありません。am*amでは、「志進館」(平成31年4月開所の就労移行支援事業所)と、その先の選択肢としての「B-up」(令和4年4月開所の就労継続支援B型事業所)の他にフリースクールもしています。18才未満の子が支援から漏れないようにするためです。また、志進館は障がいがあなくても「家庭の事情」がある人も利用できるようにしています。現在、志進館には8名、B-upには7名の利用者(キャスト)がいます。

am*amのカリキュラムには、「今だけプログラム」や「ここだけプログラム」「君だけプログラム」があります。また、朝のミーティングの「ありがとう見つけ」のコーナーでは、些細なありがとうを見つけ、一日の始まりにポジティブな思考が活性化し、毎日楽しく過ごせるようにしています。



○ 就労継続支援 A型? B型?

A型とB型には、利用期間、目的、対象者、雇用契約、賃金、年齢制限などの違いがあります。賃金の違いとして、A型は最低賃金が保証されるのに対してB型は保証されません。就労移行支援は、就職に向けて学ぶ場所ですので、基本的に賃金はありませんが、志進館では支払っています。

○ 「偏差値」から「変差値」へ

これからは、「偏差値」ではなく、人とどれだけ変わっているかという「変差値」の時代だと思います。だれでも得意なことだけではなく、できないことがたくさんあります。そんなとき、自己肯定感を高くもって、できないことを「できないから、助けて」と言えることが大切です。「できないことがある」ということは、人と繋がるための一つの才能だと思います。

○ おわりに ～わたしの願い～

私を育ててくれた大好きなふるさと「丹波」を、持続可能で多様な個性が生き、彩り豊かなまちにしたいと思っています。私がしてもらったように、どの子ども大切にされ、安心して暮らしてほしいと願っています。そのためには、まず支援の必要な子を「正しく知る」ことです。そうすれば「適切な支援をする」ことができます。そして安心感をもった子どもたちが、翼を大きく開いて羽ばたき、丹波の宝になることを願っています。私たちam*amのスタッフは、より適切に、より効率的に支援できるように、チームワーク・フットワーク・ネットワークを大切にしています。キャストもスタッフもそれぞれの「ちがひ」や「変さ」、その凸凹を失わずにドンドン磨いていきたいと思っています。これからは「変差値」の時代です。